



教えられない
教師の話

じゅしん

彼女の細い髪が教科書をくすぐっている。にやけたような顔をして、そんなに幸せそうにされては起こすものも起こせない。

「...ねえ、起きないと」

控えめに声をかけても、もちろん覚醒するようなことはない。

1学期もそろそろ終盤に近付き、気持ちがたるむのはわからなくもないけれど。睡眠時間を削り授業の準備をしている私のような新卒新任の教師からしてみると、彼女の堂々たる熟睡は羨ましいくらいだ。

とにかく起こさないわけにもいかない。教師たるもの、生徒を教育せねばならないからだ。

「まったく、大したものね」

溜め息まじりにさっきからどれほどサラサラなんだろうと気になっていた髪に指を絡ませる。起きないんだからこれくらい許されるだろう。猫の体毛のようなそれは、サラサラでふわふわだった。ずるい。左耳には大量の(といっても3つだが、私には大量だ)ピアスがついていて驚いた。教師たるもの、生徒を教育せねばならない、のに。

「.....いい加減、起きてください」

ぼんっと頭をはたくと、痛っとくぐもった声が聞こえた。

がばっと顔をあげた彼女が眠そうに口を尖らせる。

「何ですかあ、筒井先生...」

「授業、始まっているのではないですか？」

「嘘ッ!!やっぱ、あ、ありがとうございます！」

彼女は慌てて枕にしていた教科書を抱えた。扉にぶつかりそうな勢いで職員室を出る。それでもぶつからないのだから慣れたものだ。ぱたぱたぱた、とスニーカーらしからぬ足音が廊下に響き渡る。

「廊下を走ってはいけません!!」

「筒井先生、あとで缶コーヒーおごりますー！」

「...まったく」

彼女が走り去った後に、一枚だけ廊下に落ちている白紙の小テスト用紙をつまみ上げる。万が一これが採点済みのものだったら大問題だ。

「まったく」

もう一度呟いて、授業で使うプリントに不備がないか点検する。小テストは多めに刷っていたのだろう、飯野先生が戻ってくる気配はない。そういうところはしっかりしているというか...抜け目ないんだよなあ。

なのに、ここ最近空き時間には高確率で寝ている。理由を聞けば、近所の公園に目が離せない猫がいるのだと言う。たぶんどこかで飼われている猫だと思う、と静かにポツリと言っていた。

猫ねえ...。いっそ飼ってしまえと首輪でもあげようかな。そんなことを考えながら準備を進めっていると、チャイムが鳴ってしまった。次も空き時間。ただし、副担任としての仕事がある。

席に戻ると、コトンと缶コーヒーが目の前に置かれた。

「今日もありがとうございました」

「ほんと、気を付けてくださいよ...」

猫、かあ...。こう毎日缶コーヒーを買うのは彼女も大変だろうに。

私には絶対に人には言えない秘密がある。社会的にも問題があるし何より教師失格だ。

「筒井先生、お疲れですねー？」

「あ、飯野先生...」

反省の色がない彼女は今日も私のお気に入りの缶コーヒーを机に置いた。何回目だろう。親友と呼んでいいと思っているこの同期にすら、言えない秘密。

「飯野先生は...悩むこととかあるんですか？」

「なっ、私だって悩み事くらいありますよ！うちのクラスはなんであんなにいい子達なんだろう...私、ちゃんとやれてるのかなって！あ、そういえば筒井先生のクラスの古賀くん、最近授業中に寝ちゃうようになったんですけど、何か知ってます？」

古賀くん。彼がまさに私の悩みの種で秘密の張本人。

「...はあ...。参ったなあ...」

授業中に寝てる、か...。夜はちゃんと寝ているはずだけど。何故知っているかって、それは、毎晩彼が寝るのを見ているからだ。...私の部屋の、私の隣で。

+++

「今日、飯野先生に古賀くんが毎回寝てますよって言われたんだけど」

「俺の情報収集？照れるなあ」

「違う」

ソファでくつろぐ古賀くんを尻目に、明日の授業の準備をする。

いつの間にか、当たり前のように家に来るようになった彼は、制服を脱いでもやっぱり高校生だ。なのに、飄々として捕まえられず、摘まみだすことすらできないでいる。

「いい加減、家に帰った方がいいと思うんだけどなあ」

「やだね。最初にここに連れてきたの、先生じゃん」

「...そうね。お金でも渡してビジネスホテルにでも泊まらせるんだった」

深夜の繁華街でぶらぶらしている生徒を見かけて気が動転したのもある。とにかく、彼を家に

連れてくるべきではなかった。

「……お風呂に入ります」

「じゃあ俺、ご飯作ります」

古賀くんの作るご飯は、思ったよりは美味しかった。以来、嬉しそうにご飯を作ってくれる。私が作っても美味しそうに食べてくれる。

……………これって、同棲というものではないだろうか。

化粧を落としながら、ふとよぎった言葉に目を見開く。痛い。目にクレンジング剤入った。

「……同棲…」

これ、あれだ。学校に知られたら一発でクビだ。しかも、…条例違反。逮捕も有りうるんじゃないだろうか。

そもそも、私は古賀くんが好きなのだろうか。流されるだけ流されて、逮捕されるなんてことになったら——…私の人生終わりだ。古賀くんも、わだかまりのあるまま家に帰らなきゃいけない。

…いや、そもそも、古賀くんは家に帰りたくないからうちに避難しているだけで。うちにくれば雨風は凌げるしご飯はあるし寝るところもあって体も慰め…。

「あ…れ…？」

なんかおかしくない？

古賀くんはなんでうちに来るんだろう。私のことなんだと思ってるんだろう。

とても惨めな答えが浮かんで、そうじゃないと首を振る。でも、そうじゃなかったら、社会的に許されない関係になる。違う。どんな関係でも生徒が教師の家に入り浸るなんておかしい。

「先生、ご飯できたよ」

「あ、ごめん、すぐあがる」

バシャバシャ顔を洗って、お風呂からあがる。知らず、溜め息がでる。体を拭いてルームウェアを着てバスタオルを洗濯機に入れると、古賀くんの服が入っていた。ああ、もうこんなにも浸透してしまっている。明日の朝干せるように洗濯機の予約を入れると、夜ご飯の良い匂いが漂ってくる。

「目、赤いけどどうかした？」

「あ…さっき、クレンジング剤が目に入っちゃって」

「先生、可愛いんだから化粧しなくていいのに」

...だめだ。古賀くんに可愛いと言われるのが、こんなにも嬉しい。

立ち尽くして動かない私の傍に寄ってきて、髪の毛をタオルで拭きながらおでこにキスをしてくれる。

「...古賀くん...。ゆうひくん」

「なあに、さいこさん」

「.....ご飯を食べましょう」

「はい」

こうして問題を後回しにしていったら、いつか後悔するかもしれない。

ご飯を食べ終えてソファで仕事の続きをしていると、隣に古賀くんが座った。

「初めて名前呼んでくれた」

膝枕の状態で、嬉しそうにこちらを見ている。

「雄飛くん」

「彩子さん」

「雄飛くん」

「彩子さん」

「私は、雄飛くんのこと好きになっちゃいけないって思ってた。だから、せめて、高校を卒業するまで好きって言わない。ごめんね」

「...うん。俺はただの家出少年だよ」

ぎゅっと私のお腹に腕を回して、大きな体を縮こまらせている。

頭を撫でると、彼はとても弱弱しく私の名前を呼んだ。

「でも、やっぱ、俺は好きって言っていいよね？」

「うん」

「好き」

「うん」

「彩子さん、好き」

「...うん」

もっと違う出会い方だったら、こんなに苦しめなくてよかったのだろうか。

「雄飛くん、寝るならベッドに行って」

「彩子さんも」

「え？わっ」

どさっとベッドに倒れ込む。

ルームウェアをめくりあげる手をはたき落として電気を消すと、彼は小さく溜め息をついた。

「生殺し」

「ちゃんと夜寝て、授業中起きてなさい。おやすみ」

「...おやすみ」

しばらくすると静かな、規則正しい寝息が聞こえてくる。

小さな子供のようにしがみついて眠る彼は、こんなにも愛おしいのに。なんで全然、うまくいかないんだろう。

年上の恋人

「寝なさい、ね」

肘をついて、しがみついてくる彩子さんの背中を叩く。

「寝れるわけないんだけどなー」

「...うっ、...ゆうひ、くん...ひっく」

毎晩のように躡られている彩子さん。

俺のせいなのかな。俺があの日、この人に近付かなければこの人はこんな風に躡られずにすんだのだろうか。

「大丈夫だよ、彩子さん」

抱きしめて涙を拭くと彩子さんは俺の胸に顔を埋めた。

この人は、子供のように表情がくるくると変わる。俺が子供のように甘えると嬉しそうに得意げにしているけれど、細い体は面白いくらいに俺の力には敵わない。押し倒して抑えつけてしまえば振り払われたことはない。彼女は本気を出していない、なんて言うけれど。

大丈夫だよ。囁くと小さく返事が返ってくる。寝言だ。けれど、嗚咽が小さくなるのがとても嬉しい。

何が大丈夫なのかはわかりもしないけど。

――せめて、高校を卒業するまで好きって言わない。

それじゃ、全然解決にはなってない。自分でがんじがらめにした鎖を、彼女は解けるのだろうか。

謝るのはこっちの方だ。

子供のわがままに付き合わせて、何度も何度も心まで犯した。彼女の心は、壊れてしまった。俺が壊した。

「彩子さん」

「...ん」

「ごめんね」

聞いてないはずなのに、ぎゅっと抱きしめる腕に力がこもる。

首筋に汗で張り付いた髪を払って、額にキスを一つ。

今頃、夢の中で誰かに責められているのだろうか。生徒に手を出すなんて、と。それとも俺が腕を掴んでいるのだろうか。俺を見捨てないでくれ、と。

「ごめんね」

俺だけを考えればいいのに。

「好きだよ、彩子さん」

「ゆうひくん...？」

「うん」

卒業まで、1年半。その間、彼女は耐えられるだろうか。

身を裂くような罪悪感と、それが見せる毎夜の悪夢に。

「ごめんね」

+++

「古賀くん」

「...？」

今日の授業は起きてたはずだ。

「何ですか、飯野先生」

「君が今まで堂々と寝てくれたペナルティー。私の仕事を手伝いなさい」

「はあ」

右耳の3連ピアスがきらっと光る。

不良教師。彩子さんは自分より飯野先生の方が可愛いだろうと言うが、この人を食ったような笑顔はどうしても好きになれない。まあ、いわゆる同属嫌悪ってやつだ。この人はただの生徒に近い先生なんかじゃない。

「古賀くん、今日は起きてたけど、それでも辛そうだったね。悩みがあるなら先生聞きますよ」

「それは俺の担任の仕事じゃないですか」

「そうかな」

「.....別に、悩みなんて特にありません。可愛い彼女が寝かせてくれないんですよ」

「あら、お熱い」

別に嘘ではない。寝かせてくれないではなく心配で寝れないの方が正しくはあるけれど。大量のプリントを持たされて、印刷室の隅の机に運ぶ。

「これのね、5枚セットで左上をステープラーで留める作業です」

「...ハイ」

ステープラーって何だ、と思っているとホッチキスを手渡された。

「おねがいします」

「ハイ」

今日は先に帰ってご飯を作ってしまったかったのに。自業自得か。

「その彼女とは長いのー？」

「出会ったのは1年半前だけど、そういう関係になったのはけっこう最近...1ヵ月とかそれくらい」

「ふーん。それならまあ、盛り上がるもんだよねー」

「教師の言葉とは思えない」

「若い子を抑圧した方が可哀想だよ。体力有り余ってるんでしょ。ただそれに付き合う20代女子はたまったもんじゃないからね、それはわかっというてね」

「なっ」

「私は何も聞かされてないけど。...古賀くんが寝始めた時期と筒井先生がしんどいって言い始めた時期がぴったりだから。1年半前出会ったっていうのも当てはまるしね」

意外と鋭い。いや、そう思わせないように装ってるだけか。特に何も言わないってことは、味方と考えていいのか？

「...そこまでわかってるなら、相談しますけど」

「おっ、何？」

「別に毎晩何かしてるわけじゃなくて。毎晩、魘されてるんですよ、彼女」

パチンとプリントをとめて、飯野先生がニヤリと笑う。

「そりゃ、可愛い彼女が心配で眠れなくもなるわけだ」

「...俺は相談してるんですが」

「何でうなされるほど悩んでいるかはわかってるんでしょ」

「俺のせい...だと思う」

「わかってんじゃん。筒井先生は真面目だからね。生徒に手を出すなんて教師失格だー...くらいは思ってるんじゃないかな」

「でも、俺はその根本的な悩みを取り消すことはできない。から、悩んでる」

「別れる気はないってことか」

「考えたこともない。でも...」

大丈夫だと囁いても愛してると抱きしめても、彼女は麗される。それは変わらない。

確かに別れられたら楽にしてあげられる。けどもう、彼女は決めてしまった。俺を取ってしまった。

「『好きになっちゃいけないと思ってた。だからせめて、好きって言わない』って、言われました」

「あー...」

パチン。話しながらも手は止めない。

もう少しで作業は終わる。

「そこまで言わせちゃったのか。意外といい男なんだね、古賀くん」

「意外とは余計です」

「意外だよ。君みたいなガキのどこがいいんだか」

「ガキじゃないところじゃないですかね」

「へえ、教えてほしいね」

「浮気はしない主義でして」

飯野先生が吐き捨てるように笑う。この人は何のために笑顔の仮面をかぶるのか。俺には関係ないことだとしても、俺の前でその仮面を脱いだのは事実だ。

「で、どうすんの。根本的な原因を解消できないならさ」

「...俺としては、学校を辞めても」

「彼女を追い詰めるだけだよ。彼女ほどのプライドの高さなら大学くらい出とかないと話にならない。結婚したいと思ってるなら彼女より稼がないと共働きの事実婚で子供なしってのが現実的かな」

「アドバイスどーも」

「ま、寝顔見つめてる暇があるならいい大学いけるように勉強でもしとくことだね。しょうもない私立なんか行ったら金の無駄だよ。君がしっかりしてたら大丈夫じゃないの」

投げやりに言って最後のプリントを机に放り出す。飯野先生は柔らかそうな猫っ毛をいじりながら溜め息をついた。

「...なんで俺の前で素を見せるんスか」

「『無邪気な飯野先生』じゃ、牽制にならないでしょ。筒井先生をこれ以上苦しめるなら潰す。私は、異性が恋愛対象なんて言ったことは一度もないからね」

本気なのか冗談なのかわからない瞳がニンマリと細まる。

どうリアクションしたらいいのかわからず、はあ、とかはい、とか適当に返すと、飯野先生はつまらなそうにした。

「間違ってもデートなんてしちゃだめだよ」

「わかっています」

「はい、じゃあ進路相談終わり。楽しんで推薦で入りたいなら授業中寝ないでねー」

今までの低い声はどこへいったのか、いつものトーンで手を振られ拍子抜けした。本当に意味がわからない。

飯野先生との会話を思い出しながら家に――彩子さんの家に、帰る。

大学か。考えたこともなかったが、大卒という手札は確かにあった方がいいのかもしれない。確かに、彩子さんは学歴社会で生きてきたんだからそれも重要だろう。勉強なんてできなくていいと思ってたんだけどなあ。

「おかえり」

その言葉だけで、こんなにほっとするんだ。

微笑む姿がどうしようもなく愛おしくて、靴を脱いで鞆をその場に取り落とした。手を伸ばしたら、その手を握ってくれる。

「彩子さん」

「...どうしたの？」

不安そうな声に答えず、細い体を折れそうなほど抱きしめる。

「ちゃんと、しあわせにするから」

「うん」

「だから、泣かないで」

「？」

泣いてないよ、とやんわり言う彩子さんの頭を撫でるとくすぐったいと笑う。

「どうしたの？変な雄飛くん」

守ろう。どんな困難があっても、悪夢からも。俺を選んでくれたこの人が幸せになるように。

飯野先生がご飯に誘ってくれるときはロクなことがない。別に、彼女が何か面倒なお願いをするときだけご飯に誘うとかそういうわけじゃない。飯野先生がご飯に誘ってくれた日は、何かが起こるというジンクスが私の中であるのだ。

「筒井先生、やつれてますよ。ほら、ちゃんと食べて」

「...この前、相談した件ですが...」

「あー...えっと、彼氏が寝かせてくれないっていう」

「違います。許されない間柄っていう話です！」

飯野先生がパスタをフォークに巻きつけて大きな一口を頬張る。気持ちのいい食べっぷりだ。

「古賀くんは別れる気はないって言ってたし、どうしようもないんじゃない」

「.....相手が古賀くんだって、言いましたっけ？」

「あ」

素直にしまった、という顔をする飯野先生。

でもその直後にパスタをまたくるくる巻きつけてそれを頬張る。この人の言い訳はしないところは嫌いじゃない。

「まさか古賀くんが」

「あ、本人がべらべら喋ってるわけじゃないですよ。消去法と仮説でかまかけたらビンゴだったんです」

化学専攻、飯野先生は意外と理論詰めで人を追いこむ。人間関係も数式に置き換えている節があるし、本気なのか嘘なのかわからない演技も多い。

とにかく変な人で、変な人と言えば飯野先生だと言っても過言ではないのだ。

「あ、でも相談されまして。筒井先生を幸せにしてねって言いました」

「そうですか」

「それで、話の流れで私が筒井先生を恋愛対象にしてることになりました」

「はあ？どういうことですか」

「...いや、私もわかんないんですけど...つい口をついて出た冗談で、古賀くんもなんか微妙なりアクションで」

つまり古賀くんを笑わせようと冗談を言ったらいつもの本気なのか嘘なのかわからない顔で言

うから古賀くんが反応に困ったわけだ。それで冗談だということもできなかったと。

ほら、ロクなことがない。まったく、どうしてそんな適当に冗談が言えるんだか。

「.....でも私、お付き合いしてる人いるし、ごめんなさい」

「え、何その...私がフラれたみたいなの...。ていうか飯野先生、そんな人いたんですか」

「いますよー！...あ...付き合おうとかそういう、ちゃんとした言葉はないんですけど」

思わず息を飲んだ。飯野先生がこんなに辛そうに笑うなんて。

それでも笑うんだ、なあ...。

「筒井先生の悩みとか痛みって、ほんとはよくわかるんです」

「...飯野先生」

いつも明るい彼女をこんな顔で笑わせることができるなんて、どんな人なんだろう。

この人も、生徒と付き合っているんだろうか。それとも、別の許されない相手なのか。

「私達、ほんと...全然似てないのに似た者同士ですよ」

「.....知花ちゃん」

「何？」

そうだ。ここはお互い先生じゃなくて、親友同士として。

「私じゃ役に立たないかもしれないけど、何かあったら言って」

「うん。何かあったら一番に彩子ちゃんに言う」

飯野先生が辛そうな顔で笑うのを、私はただ黙って見ていることしかできなかった。

何かあったら一番に彩子ちゃんに言う。

筒井先生はずるい。それに頭がいい。いざとなれば自分が担保になることを知ってて、躊躇いなくそれを使う。

ほろ酔いで筒井先生と別れて、いつもの公園に足が向かう。もう暗い。あの人はいるだろうか。早く帰って明日の授業の準備をしなきゃいけないのに。

「飯野先生」

いた。

ベンチから立ち上がって出迎えてくれる姿を見て思わず頬が緩む。

「知花って呼んでくださいってば」

「そうだった。今日もお疲れ様、知花」

「そちらこそ、お疲れ様」

「行こうか」

「うん」

筒井先生。...彩子ちゃん。あなたはずるくて、頭がいい。だけど私はきっとただただ狡猾い。

もう何かある、ということはないんだ。既に私は重大な背徳を犯してしまっていて。

もう、戻れないんだよ。

バレリーナ

折れそうな、細すぎるほどの体で彼女は踊りながら歌っていた。それは小さなオルゴールのふたを開けたらくるくる回る人形のように思った。

僕が見ていることに気付くと、彼女はびっくりした様子で踊るのをやめ、慌てて去っていった。

興味を失って携帯電話に視線を落とす。折れそうな、細すぎる――針金のような体が、しなやかに視界の端を駆けていった。

「バレリーナになりたかったんです」

針金のような体を折り曲げ、膝を抱えて彼女は言った。毎晩のように見かけるからか、彼女が僕を見つけても逃げなくなってから1週間が経った。

バレリーナか。それならば異様に細い体にも納得がいく。飛んだり持ち上げられたりするからなんだろうが、バレリーナって人達は皆細すぎる。

けれど、なりたかったということはバレリーナではないってことだ。

「今は何になりたいんですか？」

「いい先生に」

「学校の先生になりたいんですか？」

「高校で、化学を教えてます。だから、いい先生に」

「そうなんですか。バレリーナは諦めたんですか？僕は詳しくないけど、上手だと思うのに」

「ありがとうございます。諦めました。でも、捨てきれずにいるんです」

あまり顔には出さないようにしたけれど、びっくりした。大学生くらいだと思っていたから。ふわふわの、子供のそれみたいな細い髪が風に揺れる。右の耳に光る3つのピアスは、幼い顔には不釣り合いだと思ったのを強く覚えている。

彼女と話すことはごくわずかで、僕が彼女を見る時、彼女はほとんど踊っていた。

「――あ、飯野先生」

「こんばんは。酔ってますね？」

「珍しい、休憩中ですか？」

彼女の隣に腰をおろす。飯野先生。中央高校の化学の先生。聞き出せたのはここまでだ。もっとも、僕のこと会社員であることと名字くらいしか知られていないだろうけれど。

「来年度、クラスを受け持つかもしれないんです」

「そりゃすごい」

「忙しくなったら、きつともうここでは踊れません。そう思うと少しさびしくて」

「クラス担任だったら進路指導とかもあるもんなあ」

僕もさびしい、とはどうしても言えなかった。偶然、帰り道に見かけるバレリーナ。彼女にとっての僕は観客の一人なのだから。

風に乗って飛んでいきそうな、細い体。僕はきつとその手を掴めない。理由がないんだ。

「飯野先生みたいに一生懸命な先生だったら、クラスの子達も幸せですね」

「そうだったらいいなあ」

その日、飯野先生は何も言わずにただ座っていた。いつものような会話はなく、いつものようには踊らない。そんな沈黙を打ち破ったのは、彼女の別れの言葉だった。他愛ない、なのに僕にとっては永遠の別れのように聞こえた、さようなら。

これでよかったんだ。

一人、公園のベンチに座って煙草をふかす。そういえば彼女の前では煙草なんて吸わなかった。元々無性にイライラするときに吸っていただけで。

ああ、僕はイライラしているのか。

けたたましい携帯の着信音に、溜め息を吐いて携帯を開く。相手はわかってる。元幼馴染の、彼女だ。正確に関係を言い表わせる言葉は、とうに消えてなくなったように思う。少なくとも僕は。

「...ごめん、残業で遅くなる」

電話に出るなりそう言って、また煙草を吸う。彼女とのこれからのことも、本格的に考えなくちゃいけない。小さい頃に交わしたおじいちゃんとおばあちゃんになっても、という約束通りなのか、それとも別れるのか。それも含めて、全部の将来を。僕がそれを話題にすると彼女はヒステリック気味になるから、少し後回しにしすぎた。

だけどそのおかげでこうしてベンチで煙草を吸う日々が続き、飯野先生に会えたのだ。

けれどきつと、これでよかったんだ。彼女には幸せになってほしい。願わくば僕と、なんて。

おこがましいのだ。

「宇治川さん」

「！」

「.....宇治川、さん」

「飯野先生、...どうかしました」

か、と言う前に目を見開いていた。ポトッと煙草を取り落として、慌てて踏みつぶす。

「そんなに辛そうな顔されたら、私...放っておけません」

鈴の音のような声は耳の横で聞こえる。ふわふわの髪の毛から良い匂いがする。

飯野先生が僕の首に回した腕に力がこもる。ほっそりした体を抱きしめ返すと、一瞬腕が緩んで、またぎゅっと僕にしがみつく。

「...別の人がいるのは、わかってるんです」

「うん」

「だけど、放っておけなくて」

「ありがとう」

「私、別に宇治川さんと付き合いたいとかじゃないんです。ただ、お話を聞いてもらって、ご飯でも食べれたら。お話を聞いて、あなたの支えになれたらって...」

核心を突いた事は何も言わない。暗黙の了解。

大人はずるいな。誰が言ってたんだっけ。さっき電話してきた元幼馴染が、小さい頃に言っていたのかも。

「...僕も、あなたのバレエがもうちょっと見たかったんです」

それだけでないのは、誰よりもよくわかっているけれど。

浮気相手でもいいの？とも彼女と別れるよ、ともはっきり言えない優柔不断な僕を、飯野先生は優しく抱きしめる。

「いい先生に、してあげられないかも」

「はい」

折れそうなほどの細い体を抱きしめて、煙草はもう吸わなくていいかもしれないと考える。視界の片隅で煙がかき消えた。

俺の好きな人は、どのクラスメイトよりも美人で、どのクラスメイトよりもスタイルがよくて、どのクラスメイトよりたぶん俺のことを知ってた。高2の時の担任で、化学担当だった飯野先生。

俺が1年の時新卒で、ただ化学の授業しか接点がない時から可愛いと思ってた。それで、2年目で担任。優秀なんだろうなあと思った。けどその時は別に好きとかそういうんじゃない。決定打は、2年の秋の昼休み。親父と喧嘩した母親が俺の分まで弁当を作らなくなった頃、先生がそれに気付いてパンをくれた。そんだけのこと。だけど俺にとっては人に気にかけてもらってるという事実が嬉しくて、そのときの先生の憐れむでも心配するでもない笑顔が特別に可愛く見えた。

高校の見学に来た2歳下の弟も可愛いと言っていた。だろ？とか言ったら俺の好きな女の方が可愛いとか言う辺り妙に素直でバカな奴だ。2年経った今でも彼女はいないようで、一人暮らしだという親友の家に入り浸っているようだ。まあ、弟のことはどうでもいい。

俺はとにかく飯野先生が好きで、化学の成績が特別よくなるわけでもなかったけど授業はまじめに聞いていたし先生の手伝いとかもした。実験もバカ高校の生徒に合わせて塩の結晶見るとかで先生はつまらなかっただろうけど、それでも笑ってて可愛かった。

先生がたまに目を伏せて笑うのも、俺の前だけで。ちょっと特別なのかと思ってた。

だけど連絡先を聞いても上手くかわされたし、告白もしなかった。卒業したらアタックしようと思ってた。

3年の時、両親が離婚した時、関係ないのに先生に相談したときは黙って聞いてくれた。両親の離婚は薄々感じとっていたから別にショックでもなんでもなかったんだけど、先生に相談という名目で話せばよかったから。先生はごめんね、と言った。いいアドバイスができなくて、ごめんね。

母親が出て行って広くなった家で、なかなか帰ってこない親父と弟を待つでもなくただらただら過ごす。俺は高校を卒業して、先生を忘れられずにいるただのフリーター。就職して、それから先生に会いに行くのも悪くない…。そう思って早数ヵ月、だ。

そんな、走馬灯のような2年間で駆け巡った。耳の横をガンガンと殴りつけられているような頭痛がする。

「いたのか、篤司」

「ひ、久しぶりだね...宇治川くん」

何で、先生がここに。何で親父の隣に。

両親の離婚は先生のせいで。母親が弁当を作らなくなったのも、きっと先生のせいで。

何それ。

「ごめんね、って、そういう意味だったんですか」

目を伏せて笑うのも、俺に申し訳ないから。

そういうことか。

こっちは今でも先生のことが忘れられねえってのに。

「...帰ります、宇治川さん」

「いいよ、知花」

チカ、とか。名前で呼んだことなんて、俺はない。ただそれだけなのに、打ちのめされたような気分で。

俺なんか先生の手を握れないことは、予感してた。ただ、その手を握るのは、俺の知らない勝ち目も何もない完璧な男であってほしかったんだ。

猫に首輪

たまたま、恋した人が既婚者だっただけだ。

宇治川さんは私の体を針金のようにだと面白がって、折れてしまうのではないかと思うほど強く抱きしめてくれた。手がきれいだねと言ってくれた。そして愛しい、好きだと愛を囁いてくれた。

けれど、奥さんとのことは何も言わなかった。それでいい。私は離婚してほしいとまでは思っていなかった。

「何これ」

宇治川さんが小さな赤いベルトのようなものをつまみ上げる。

「猫の首輪」

「猫なんて飼えないだろ？」

「……うん。飼ってる気分になろうと」

同僚がくれたもの、と説明しても良かったのだけど、言葉を濁す。公園で話していただけた曖昧な期間のときに、猫に例えて説明していたなんて知ったらきっと不愉快だろうから。彩子ちゃんは、ふらふらしてる飼い猫なんか飼ってしまえと首輪をくれた。

でも私は、彼を縛り付けるつもりはなくて、割り切って付き合うつもりで。言い訳がましく、心の中で何度も言う。私、割り切って付き合ってるんだ。

実際のところ、この関係は浮気を是とするものだ。だって私がそもそも浮気相手なのだから。縛り付けることなど、できるはずもなかった。

「知花」

名前を呼んで、私を想ってくれるだけで十分。宇治川さんに引き寄せられて、慈しむようなキスをすれば、私は体がとろとろにとろけていくような気分だった。

彼には帰る場所がある。ぼんやりとしつつも見送った後は、いつも部屋の中がさびしくてたまらなくなる。

文字だけのやり取りではいつも、好きとか会いたいとか、教え子たちのような浮かれたものだけれど、実際に口にしたことはなかった。

「……宇治川さん……」

名前を呼ぶだけで、精一杯で。

帰ったよ、と知らせる連絡が届いてようやく、ほうっと息をついて、私は眠りにつく。

「飯野先生、なんか綺麗になりましたね。彼氏でもできた？」

「……そう？」

特に答えずに彩子ちゃんのお弁当箱から勝手に卵焼きを取る。彩子ちゃんは、もう、などと言いつつもお弁当箱を傾けて卵焼きを取りやすいように配慮してくれた。お返しに、購買部で買った飴を一つ渡す。

不倫してるなんて言えるはずもない。ましてや、相手が担任をしているクラスの生徒の親だなんて。

宇治川くん。目はきつと母親似なのだろう、宇治川くんに見つめられると、無言で責められているような気がして苦手だ。最近母親が弁当を作らないとぼやいていたけれど、奥さんは何か感じ取っているのだろうか。

「……どうかした？」

「ううん、何でも……」

彼は忙しく働いているのに弁当もないのだろうか。

彼は残業だと偽って私の家にやってくる。ご飯を食べて、一つになろうとするように体を重ねる。

「ずっと一緒にいたい……」

ぼんやりとした頭で宇治川さんのキスを受け入れていると、気持ちがぼろっと口をついて出てきた。

途端に、ずっと一緒にはいられないという事実をまざまざと突きつけられて、堪らなくなってぼろぼろと涙が出てきた。涙が、うまく止め

られない。

「知花、どうしたの、知花」

「……好き……」

「うん、僕も好きだよ」

「……好きだから、辛い……。一緒にいたい……」

ああ、私、今、彼に離婚してほしいと願ってる。なんてことを口にしてしまったんだろう。今までごまかしていた気持ちを、認めてしまった。

彼は私を泣き止ませて、静かに帰っていった。

もう何もかも終わりだ。暗い部屋の中でゆっくりと目を閉じながら、走馬灯のように彼との楽しかった日々を思い返していた。手をつなぐだけで幸せで、ただそれだけだったのに。

何日か仕事を休むと、彩子ちゃんがお見舞いにきてくれた。

「何も言わなくていいよ。でも、ご飯は食べて」

「……ん……」

「猫、飼わなかったんだね」

「……飼えなかった……。飼い主のところに、戻ったのかも……」

あれから、宇治川さんは来なかった。結局、私は遊び相手だったのかもしれないと思っは、泣いた。自分でも思っていた以上に、宇治川さんが好きで好きでたまらなかった。

ようやく出勤できるほど落ち着いた頃、連絡もなしに宇治川さんはやってきた。

「……もう……来ないんじゃないかと」

「……離婚してきた」

「……え……」

「ずっと一緒にいられる」

「そう、なの……」

そうして彼は、針金のような私の体を抱きしめた。

昔川と田んぼに囲まれていたから川田地区。嘘か本当か知らないが、そこに昔住んでいた飯野ナントカさんという金持ちが息子二人に土地を分け更に息子が土地を分け、川田地区の実に4分の1が飯野という名字をもつ家庭が登場したらしい。というのは親父に聞いた話なのだが、近所に飯野さんはめちゃくちゃ多い。かくいう俺も飯野奈津。金持ちの祖先の名残も何もない一般家庭の一人っ子だ。

さて、なぜそんな話をするのか？なぜならこれから出てくる人の名字がすべて飯野だからだ。

目の前にいる、どんより沈んだ表情の8歳年上の幼馴染み、知花ちゃん。何故こんなことになっているのか、俺は未だに理解してない。知花ちゃんママがお袋に会いにうちに来たと思ったら、知花ちゃんを家から連れ出してくれと頼まれたのだった。

しかし俺がまともに女性と話せていたのは中学まで。俺が何やら落ち込んでいる知花ちゃんを励ませるとは思えなかった。女性が苦手なのだ。

だが、目の前にいる幼馴染みを放っておけるほど女性がキライにもなっていない俺なのだった。チラチラ知花ちゃんを見ては口をつぐむ。

「知花ちゃん...」

「奈津くん。久しぶりだね。大きくなったね」

はははっと目が笑わないまま知花ちゃんが笑う。

お袋から聞いた話だと3月で突然仕事を辞めたとか。理由は知花ちゃんママも知らないらしく、自暴自棄になっているところを実家に連れ戻したのだとか。

「ねえ、奈津くんって浮気とかしてたって言ってたよね」

「え...」

言ったっけ。言ったかもしれない。俺のバカ。女ちょろい、とか言った気がする。

ちなみにそれが俺が女性が苦手になった原因だ。中学の時は5股を達成するほどモテまくっていた俺は学校一おとなしかった元彼女に殴られて以来、彼女全員にフラれただけでなく女子に総スカンをくらい完全孤立、今では半引きこもりの地味青年となったわけだ。自業自得なのかもしれないが、見事な転落っぷりに女性と関わるのはこりごりだと思っている。

「まあ...若気の至りみたいだな」

「浮気性ってなおらないのかな」

浮気されてここまで落ち込んでるってことか？

浮気した側の俺で慰められるだろうか。

「結婚しようって言ったのに...」

破談？

知花ちゃんママはそんなこと一言も言ってなかったけど。

「知花ちゃんも、元は浮気相手？」

「...」

知花ちゃんは身じろぎもしないけれど、わずかに表情が強張った。ビンゴか。

誰かから奪ったらしっぺ返しがかかるんだ。俺もそうだ。

「経験者とか偉そうな言い方できることじゃないけど、かなり痛い目みないと繰り返すと思うよ」

「.....そっか」

「スリルとか秘密とか、最低なんだけどなんか麻痺して楽しくなるんだよな」

「私の場合は秘密なのかな。もしかしたら、離婚の口実かも」

「離婚!？」

聞いてねえぞ。

「ちょっと待って、それって不倫...」

「...そうとも言うかもしれないけど、私達は出会うのがちょっと遅かったただけだもん」

「あー...そう」

「.....」

「知花ちゃん」

「現実、受け止めなきゃいけないのはわかってるんだよ...」

知花ちゃんが初めて無表情を崩してテーブルに突っ伏す。声も感情を帯びたような気がする。

「奈津くんと同い年の息子さんが中央高校にいて...耐えれなくなって辞めちゃったし。第一か華宮で就活しようかな...」

「息子が俺と同じってことは、その相手かなりのオッサンだったんだね」

「あーあ、同じタブーなら彩子ちゃんみたいに高校生に手出せばよかったー」

おい。その彩子ちゃんも何してんだ。

「ありがとう奈津くん。ちょっとスッキリしたよ。お母さんにもこんなこと言えないし」

「再就職できるといいね。新しい恋とかも」

「うん。彩子ちゃんに連絡しよう。あ、奈津くん受験生だよな、進学？化学のことは何でも聞いてね。コーヒー代払っとくよ。じゃあね」

一気に捲し立てて知花ちゃんは帰って行った。

切り替え早いな…。さっきとは別人みたいだ。中学でも元彼女達は切り替え早かったもんな…。川口は違ったっぽいけど。あいつ、元気かな。

メールの着信を知らせるケータイをポケットに押し込み、店を出る。知花ちゃん、前に進めるといいな。俺もだけど。